

一

次の短文の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。文字は丁寧^{ていねい}に書きなさい。

- ① 人々を幸せにするセイジ^{せいじ}を目指す。
- ② 川のゴガン^{ごがん}工事^{こうじ}を行つた。
- ③ オクマン^{おくまん}長者^{ちやうじや}になる夢を見る。
- ④ 学校のキソク^{きそく}を守る。
- ⑤ 友だちの失敗^{しっぱい}を厳^{きび}しい言葉^{ことば}でせめた。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には一部省略したところと、表現を改めたところがあります。)

花の色には意味がある

道ばたにひっそりと咲く雑草の花に、心打たれるときがあるかも知れない。

しかし、野生の植物が花を咲かせるのは、人間に見てもらったためではない。昆虫を呼び寄せて花粉を運ばせるためである。

人知れず咲く小さな雑草の花であっても、それは同じである。すべての花は昆虫を呼び寄せるためにあるのである。

美しい花びらや甘い香りも、すべては昆虫にやってきてもらうためのものなのだ。そのため、花の色や形にも、すべて合理的な理由がある。花は、何気なく咲いているわけではないのである。

A 春先には黄色い色の花が多く咲くようになる。

黄色い花に、好んでやってくるのはヒラタアブなど小さなアブの仲間である。もちろん、人間には黄色い色に見えても、昆虫に何色に見えているかは、昆虫に聞いてみないとわからない。よく昆虫には紫外線が見えるという話がある。黄色い花は紫外線が少ないので、紫外線が少ないというのが、アブが好む特徴なのかも知れない。

アブは、まだ気温が低い春先に、最初に活動を始める昆虫である。そのため、春先の早い時期に咲く花はアブを呼び寄せるために、黄色い色をしているのである。

もつとも、アブが好むから黄色い花を咲かせるようになったのか、黄色い花が多くなって、アブが黄色を好むようになったのかは、^①「卵が先か鶏が先か」で、よくわからない。

しかし、春先には黄色い花が咲き、黄色い花にアブが来るといふ植物と昆虫との約束事ができあがったのである。

ただし、^②アブをパートナーとするには、問題があった。

ミツバチのようなハナバチの仲間は、同じ種類の花々を飛んで回る。

ところが、アブはあまり頭の良い昆虫ではないので、花の種類を識別するようなことはしない。そして、種類の異なるさまざまな花を飛び回ってしまうのだ。これは植物にとっては、都合の良いことではない。

同じ黄色い花だからと言って、タンポポの花粉がナノハナに運ばれても、種子はできない。タンポポの花粉は、タンポポに運んでもらわなければならないのである。

それでは、アブに花粉を運んでもらう植物は、どうやってきちんと花粉を運んでもらえば良いのだろうか。これは難題である。

B、野に咲く雑草であっても、この難問を解決しているのだから、すごい。

じつは、春先に咲く黄色い花は、集まって咲く性質がある。

集まって咲いていけば、アブは近くに咲いている花を飛んで回る。そうすれば、結果的に同じ種類の花に花粉を運ぶことになるのである。

C、小さなアブは飛ぶ力がそんなに強くないので、まとまって咲いていけば、近場の花を回ってくれる。

こうして、春先に咲く野の花は、集まって咲く。春に、一面に咲くお花畑ができるのは、そのためなのである。

紫色の花が選んだパートナーは？

黄色い花は、アブをパートナーとして花粉を運んでもらっていた。

一方、紫色の花はミツバチなどのハナバチをパートナーに選んでいる。ミツバチは紫色を好む。紫色の花は紫外線も多いから、ハチは紫外線を合図にして紫色を選んでいるのかも知れない。

ミツバチなどのハナバチは、植物にとつては、もつとも望ましいパートナーである。

何より、ミツバチは働きものだ。ミツバチは女王蜂を中心として家族で暮らしている。そのため、自分の餌だけでなく、家族のために花から花へと飛び回り蜜を集めるのだ。つまり、植物にとつては、それだけ、**D**を運んでもらえることになる。

さらにハチは頭が良く、同じ種類の花を識別して花粉を運んでくれる。また、ハチは飛翔能力が高いので、遠くまで飛ぶことができる。そのため、ハチが花粉を運んでくれる植物は、**E**、しっかりと花粉を運んでもらうことができるのである。

この優秀なパートナーを惹きつけるために、ハチを呼び寄せる花は、たっぷりの蜜を用意してハチを出迎える。ところが、これには問題があった。

蜜をたくさん用意してしまうと、ハチ以外の他の虫も集まってきてしまう。せっかく奮発して用意した蜜を他の虫に奪われてしまうのだ。

^③ 紫色の花はどうやってハチだけに蜜を与えることができるのだろうか。

人気のある学校に入るためには、「入学試験」というものがある。

じつは、紫色の花も、蜜を与えるための「選抜試験」を行うのである。

紫色の花は、複雑な形をしているのが特徴である。この複雑な形が、まさに入学試験である。

身近な雑草であるホトケノザの花を観察してみることにしよう。

ホトケノザの秘密^{ひみつ}

ホトケノザは、スマレやタンポポほど知られていないかも知れないが、小学校の生活科の教科書でも紹介^{しょうかい}されるほど、身近に見られる雑草である。このホトケノザは小さな花だが、よく見ると、なかなか美しい花を咲かせている。

下の花びらには、斑点^{はんてん}のような模様^{もよう}がある。これが、蜜のありかを示す「蜜標」と呼ばれるものである。蜜標はガイドマークや、ネクターガイドとも呼ばれている。この蜜標を目印にして、ハチはこの花びらに着陸する。下の花びらはまるでヘリポートのような役割^{やくわり}を持っているのだ。ホトケノザは、ミツバチが訪^{おとず}れるのには小さいが、小さなハナバチが訪^{おとず}れる。そして、花びらに着陸すると、ちょうど着陸した飛行機を誘導^{ゆうどう}するラインのように、花の奥^{おく}に向かって蜜標が続いている。この道^{みち}しるべに従^{したが}って、花の奥深くへと進んでいくと、花の一番深いところに蜜があるのである。

横からホトケノザの花を見ると、花の形が細長く、花の中が奥深くなっている。じつは、この狭^{せま}い中に潜^{もぐ}り込んで行って、後ずさりして出てくるというのが、普通の昆虫は得意ではない。これに対して、ハチは花の奥深くへ潜^{もぐ}っていくことを得意としているのである。蜜標が蜜のありかを示すサインだということが理解できる頭の良さ、そして花の奥へと入っていくことのできる勇気と体力を持った虫だけが、蜜にありつくことができる。

こうしてホトケノザは、知力テストと体力テストによって、パートナーとしてふさわしいハチだけに蜜を与えることに成功しているのである。

ホトケノザだけでなく、紫色をした花は、どれも蜜標^④や奥に深い構造をしている。

スマレを見てもことにしよう。

スマレも下の花びらに白い模様がある。そして、花の奥深くへと潜り込めるようになっていく。スマレの花を横から見ると、花の奥を長くするために、茎^{くき}が花の付け根ではなく、真ん中あたりについていて、やじるべえのようにバランスを保っていることがわかるだろう。

もつとも、最初からハチが花に潜るのが得意だったのかは、わからない。ハチだけが潜れるように花は長く進化し、花に潜るようにハチも進化をしていく。そうして難易度を上げながら、ついには他の昆虫はたどりつけず、ハチだけが蜜を得られるように進化しているのである。こうして植物とハチとは共に進化を遂^とげてきたのである。

花と虫との共生関係

ミツバチなどのハナバチの仲間は、頭が良いので、同じ種類の花を回って花粉を運んでくれると紹介した。しかし、不思議である。

ハチは蜜が欲^ほしいだけで、植物のために働かなければならない義理はない。別に同じ種類の花を回らなくても、近くの花を回れば良いのではないだろうか。ホトケノザの花粉がスマレに運ばれたからといって、ハチには関係のない話だ。

⑤ どうして、ハチは、わざわざ同じ種類の花を回るのだろうか。

学校の入学試験は、毎年毎年、違^{ちが}う問題が出される。

もし、ある学校が昨年とまったく同じ問題を出したとしたら、どうだろう。過去問題さえ勉強しておけば、簡^{かん}単^{たん}に問題を解くことができる。

ハチも同じである。

テストをクリアして、蜜にたどりついたハチは、同じ仕組みで蜜を吸^すうことができる花に行きたくなる。新しい花に行けば、また蜜標を解いていかなければならないし、苦勞して花の奥に潜り込んでも、蜜にありつける保証はない。そうだとすれば、同じ仕組みで蜜が手に入る同じ種類の花に行った方がよいのである。

こうして、ハチは同じ種類の花を回るようになる。そして、首尾^{しゅび}よく植物たちに受粉をしていくのである。

すべての生物は、自分の得^とだけのために利^り己^こ的^{てき}に行動している。そこには、何の約束もなければ、何の道徳心もない。しかし、結果的に、そんな利己的な行動によって、人間から見ると、植物と昆虫とが、いかにも助け合っているかのような、お互^{たが}いに得^とになる関係が作られているのである。自然界の仕組みというのは、本当によくできていると驚^{おどろ}かされる。

風媒花から虫媒花へ

植物は風で花粉を運ぶ風媒花から、昆虫が花粉を運ぶ虫媒花へと進化を遂げた。

生物の進化の過程で、最初に花を訪れた昆虫は、花粉を食べに来た害虫であったと考えられている。しかし、花粉を食べる害虫が花から花へと移動すると、体についた花粉も運ばれる。⑥ これは、植物にとっても都合が良かった。

風まかせで飛ばした花粉が、同じ種類の花にたどりつく可能性は大きくない。そのため、風媒花の植物は、花粉を大量に生産してまき散らさなければならぬのだ。しかし、昆虫は花から花へと移動するから、昆虫が花粉を運んでくれるのであれば、すこぶる効率が

良い。どこに飛んでいくかわからない花粉を作るくらいなら、少し花粉を食べられるくらいは、何ともないのだ。

こうして、植物は昆虫を呼び寄せて、その昆虫に花粉を運ばせる虫媒花へと進化を遂げていった。そして、昆虫を呼び寄せるために、美しい花びらを発達させたり、ついには昆虫のために、甘い蜜まで用意するようになって、現在、私たちが見るような花々となっていたのである。

(稲垣栄洋『稲垣栄洋』「雑草はなぜそこに生えているのか」)

(注) *紫外線……太陽光に含まれる光の一部。人の目には見えない。

問一 空欄A～Cに入る言葉として最も適当なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア かし イ たとえば ウ もしも エ まるで オ 特に

問二 傍線部①「卵が先か鶏が先か」とはどういう意味ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ある一つの出来事がどのような結果につながるのかは、後にならないとわからないということ。

イ 二つのものが結局は同じようなものであって、その差がほとんどわからないということ。

ウ 関連のある二つの出来事の、どちらが原因でどちらが結果なのかわからないということ。

エ 目先の違いにとらわれてしまって、最終的な結果が同じであることがわからないということ。

オ 前後のつじつまがあわなくて筋が通っておらず、まったく意味がわからないということ。

問三 傍線部②「アブをパートナーとするには、問題があった」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) それはどのような問題ですか。四十字以上五十字以内で分かりやすく説明しなさい。

(2) 植物はそれをどうすることで解決したのですか。その答えとなる次の文の空欄に入る言葉を、本文より六字以上十字以内で抜き出しなさい。

□□□□□□□□□□

問四 空欄DとEに入る言葉として最も適当なものを、それぞれの選択肢から選び、記号で答えなさい。

D

ア 多くの花の蜜 イ 少ない量の花粉 ウ 必要な量の蜜 エ たくさんの花粉 オ さまざまな花粉

E

ア 離れて咲いていても イ 咲いている期間が短くても ウ 同じ花の色であっても エ 少ない花粉であっても
オ 花の形が違っていても

問五

傍線部③について、「紫色の花はどうやってハチだけに蜜を与えることができるのだろうか」とあるが、「紫色の花」は実際どうしているのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 花びらをヘリポートのような形にして、さらには蜜標によって蜜のありかを示すことで、どこにでも着地できる能力を持ち、目に敏感であるハチだけが蜜を獲得できるようにしている。

イ 蜜標によって他の花よりも蜜の存在を分かりにくくし、さらには花の形を細長くすることで、観察力があって体の小さいハチだけが蜜にありつけるようにしている。

ウ 蜜標と花の色を複雑に組み合わせることでハチが最も効率よく花を見つけられるようにして、それ以外の昆虫が見落とすような外見にしている。

エ 他の花との区別がつきにくいように花の形や色を単純なものにして、頭のよいハチだけがその違いを見つけてやってくるようにしている。

オ 蜜標によって蜜のありかを示し、さらには花の奥に蜜を置くことで、頭がよくて体力のあるハチにだけ蜜が与えられるようにしている。

問六

傍線部④「蜜標」とあるが、スマイレの「蜜標」はどのようになっていきますか。本文より三字以上五字以内で抜き出して答えなさい。

問七 傍線部⑤「どうして、ハチは、わざわざ同じ種類の花を回るのだろうか」とあるが、その答えとして最も適当なものを次から選

び、記号で答えなさい。

- ア ハチは、初めに一つ蜜の取り方を覚えたら、それ以外の方法がまったくわからなくなるから。
- イ ハチはたいへん頭がよくて、自分の気に入った蜜のある花の形や色を正確に覚えていてるから。
- ウ 同じ種類の花にしぼることで、他の虫と花を奪い合^{うば}って争うような事態を避け^さられるから。
- エ 同じ種類の花ならば同じやり方で蜜が手に入るため、ハチにとって楽であり確実であるから。
- オ ハチは一度花の色を覚えてしまったら、違う色の花には向かわない性質を持っているから。

問八 傍線部⑥「これは、植物にとっても都合が良かった」とあるが、なぜ都合が良かったのですか。最も適当なものを次から選

び、記号で答えなさい。

- ア 余ってしまった大量の花粉を食べてくれるから。
- イ 花粉だけでなく蜜も他の花に運んでくれるから。
- ウ 風で花粉を運ぶよりも花粉の生産が少なくてすむから。
- エ 花粉を食べにやって来る害虫がいなくなったから。
- オ ささまざまな種類の花に花粉を運んでくれるから。

問九 本文の内容に合っているものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 集団で行動する昆虫は互いに助けあう習性があるため、自然界の中では植物の得にもなるような行動をとる。
- イ 植物も昆虫も、自分の得だけのために生きていたが、まるで協力し合っているかのような関係になっている。
- ウ 昆虫は、植物がなくなれば自分たちも死に絶えてしまうことが分かっているから、植物にとって得になるような行動をする。
- エ 植物は昆虫の動きには関係なく進化してきたが、昆虫は植物の変化や動きに合わせて行動を変えてきた。
- オ 植物と昆虫はともに心を持っており、お互いが助け合えるよう工夫しながら、お互いが得になるようにしている。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には一部省略したところと、表現を改めたところがあります。)

ばあちゃんが死んだという知らせを母からの電話で聞いた「僕」は、急いで病院に向かうことになった。その前日、「僕」は学校から帰ってきた直後に、家のそばでばあちゃんが急に前のめりになって倒れ、そのまま動かなくなったのを窓から見ている。本文は、そのときのことを回想する場面から始まる。

十分くらいして救急車が来た。呼んだのは隣の家のおばさんだ。同時に僕がすぐに母の携帯に電話し、母は午後だけパートで働いている県道沿いの郊外型マーケットからすごい勢いで車を飛ばしてきた。それから僕はばあちゃんに会っていない。

夜遅く、病院から戻った母によると、ばあちゃんの頭のどこかで血管が切れたらしい。緊急手術はしたが、いつ意識が戻るかわからないと母は説明し、「明日の夜にはお父さんも帰るから、あんたはいつものようにちゃんと学校に行きなさいよ。」と言った。案外母が落ちて着いていたので、「ばあちゃんは大丈夫なんだ。」と思っていたけど、本当はもう時間の問題だったんだ。

僕は、田んぼの中を走る。走りながら病院まで一番短い距離をせわしなく計算していた。

風はひんやりとして、汗で濡れたジャージの背中をスースーと通り過ぎる。スニーカーはもう泥まみれだったが、幸い田んぼはよく引き締まり、至る所にイヌフグリやレンゲの花が咲いていた。その小さな花の根が、僕の蹴りを助けてくれたのか、粘った土に足を取られることなく前に進むことができた。

もう、ばあちゃんの声は聞けないだろう。立ったり座ったりするとき、ばあちゃんはしょっちゅう「どっこいしょ。」とか「やれ、やれ。」と言っていた。テレビをつけっぱなしにして、暇さえあればポカンと見ていた。

大豆と昆布の煮物が上手だった。僕の体操着用の袋を作ってくれたのもばあちゃんだった。だいぶ前に死んだじいちゃんの着物で作ったという袋はざらつとした紺色で、目の赤い太った龍の模様がついていた。それを担任の先生が「カッコいい。」と褒めてくれたけど、僕は本当は恥ずかしかった。それをランドセルにぶら下げていると、やけに目立つし、なんと②いうか、すごく落ち着かないものを連れて歩いている気がしたからだ。でもそれをばあちゃんに「返す。」とは言えなかった。だから、袋が破れて母がマーケットで新しいのを買ってくれたときは ① した。

そういえば、ばあちゃんは大豆だけではなく、空豆も好きだった。食べるとき口をすぼめてうれしそうな顔をしたが、② 蒸をむくときも ① した顔をしていた。

「ほらね、お豆さんの寢床はフワフワだよ。」と、むいた莢の中を見せてくれたこともある。真っ白な綿みたいな莢の中に、緑色の大きな空豆がいつも幾粒かちんまりと横たわっていて、豆の莢の内側は確かにばあちゃんが言うように、フワフワの寢床みいだった。

僕の尻をポンとたたいて、「ケン、尻の大きな男になれよ。」と言ったこともある。母が笑いながら、「ばあちゃんは、大きなお尻の男の人が好きだからねえ。安定感があつていいんだって。」と言ったが、僕はばあちゃんに好かれてもさしてうれしくなかったし、お尻が大きい男なんてカッコ悪いと思つたので「やだよ。」と答えた。

走りながら、僕はいろんなことを思い出す。

ばあちゃんが出す年賀状は毎年決まつて五、六枚で、それにはいつも太い筆で「寿」と書いてあつた。僕にくれるお年玉の袋の表にもやっぱり「寿」という字があつた。隣の家の猫がふらりとうちの庭に来ると、自分が座っている縁側の板を手で軽くたたいて「シロ、シロ、ここへおいで。」と呼んでいたが、隣の家の猫の名前は「シロ」ではなく「ブンタ」。猫の飼い主である隣のおばさんが菅原文太のファンなのだ。白黒ブチの猫だったけれど、どうして「シロ」なんて呼んでいたんだろう。それに「ブンタ」は、やけに愛想のない猫で、ばあちゃんに呼ばれても知らんぷり。そのままのっそりと裏の藪へと入っていった。

用水路で見つけたというカメを僕にくれたこともあつた。手足を引つ込めたカメの甲羅に「ケン」と銀色のマジックインキで書いてあつたのでびっくりした。「僕の名前を勝手につけるなよ。」と文句を言うと、ばあちゃんは鼻に皺を寄せて笑い、「大事なもんには、なんでも名前があるもんさ。」と言つた。カメは間もなく洗い桶から逃げ出したが、あるとき用水路に突き出したコンクリートの排水管の上で、のんびり甲羅干ししているのを見つけた。そいつが「ケン」だということは一目でわかつた。

僕は、息を切らして走りながら、ばあちゃんと一緒だつた時間を次々と思い出していった。けれども、膨大にあつたはずの時間は全部が細切れで、ほとんどのことは忘れていく。いつも一緒にご飯を食べ、すぐ近くにいたのに、どうして「全部」を覚えていないのだろう。僕が覚えているのはどうでもいいことばかりだ。

ばあちゃん、あと少しだ。県道を走る車が見えてきた。車をやり過ごして向こう側に渡り、ガソリンスタンドの横に入って、橋を指せば橋の先の丘の上に病院がある。

あと少し。

汗びっしょりだつたのでジャージのズボンからハンカチを出そうとしたとき、僕はポケットの中にある小さな筒のことを思い出した。ばあちゃんの口紅。口紅というのは正確じゃないかもしれない。たぶんリップクリーム。うっすらとしたピンク色の女の子向けのヤツだ。それも安物。

ばあちゃんはこの口紅を愛用していた。毎朝、台所のテーブルで透明なプラスチックのキャップを外して、右手の小指の先を筒に突っ込み、小指についたピンク色を唇に塗っていた。すると顔が少しだけ明るくなる。

ちびでも捨てなかつたのは、きつとあの淡い色が気に入っていたからだろう。「新しいの、買えばいいじゃない。底の底まで使うなんて貧乏くさい。」と母は言っていたが、ばあちゃんは「まだ当分もつよ。」と平然としていた。

家を出る前、台所のテーブルの上にあつたのをとっさにズボンのポケットに入れたのはどうしてなのか。あのとき、なんだかばあちゃんを待っている気がしたんだ。早くばあちゃんに届けてやらなくちゃ。そんなことを

でも考えてみたら、いまさらこんなものを持って行ってもなんの役にも立たないだろう。ポケットの中にはハンカチと家の鍵と、くしゃくしゃになったティッシュペーパーが入っていて、その間で口紅の筒は、僕の体温を吸ってひどく生ぬるく、頼りないほど小さかつた。

川が見えた。橋を渡る。猛スピードで丘への坂道を駆け上がる。病院の白い壁が川の反射でいつもより白く光っている。その大きな白い壁の正面に開いているガラスのドアに、僕は一気に駆け込んで行つた。

ずいぶんあとになって、僕は思ったものだ。ばあちゃんのためにとっさに選んだものは正しかったのだと。あの薄いピンクの口紅、というかりップクリームは、ひどく青白かつたばあちゃんの顔を、少し明るくしたのだから。

母は、病院のベッドの横に放心したような顔で座っていたが、僕が「これ。」と差し出したばあちゃんの口紅をびっくりしたように眺め、それからいきなり「バカ。」と言って笑つた。笑いながら泣いていた。それから母は、ばあちゃんとそっくりの手つきでプラスチックのキャップを抜くと、右手の小指を筒の中に突っ込み、指先についた淡いピンクを

4 ばあちゃんの唇に塗つたのだ。あ のとき、僕はなぜ、「ああ、間に合つた。」と思つたのだろう。ばあちゃんの顔が明るくなって、額や口元の皺の全部が消えて、なんだか子どもの顔みたいに見えたとき、僕は、自分がずっと走ってきたのはこのためだったんだと、はつきりとわかつたんだ。

やっと連絡が取れたのか、胸やひざに油のしみた白いつなぎ服姿の叔父さんと、東京から急いで戻つたらしい父が、息せき切つて走り込んできたのはそれから間もなくだった。

僕たちは、少し話をしてからベッドの両脇に並んだまま、静かにばあちゃんを見下ろした。白い布団の中でずいぶん小さくなつたように見えるばあちゃんの顔。手術の後に白い包帯を巻かれ、ネットのキャップをかぶせられた大豆みみたいな顔に、一点だけ春のような灯が点つていた。

父が鼻が詰まったような声で何か言った。かすれてひどく低い声だったのでよく聞き取れなかったが、たぶん、「5 顔だ。」という意味のことを言ったんだと僕は思う。

(稲葉真弓『唇に小さな春を』)

(注) *昔原文太……俳優の名前。

問一 波線部 a 「さして」・ b 「放心したような顔」の意味として最も適当なものをそれぞれの選択肢から選び、記号で答えなさい。

a 「さして」

ア たいそう イ たいして ウ 少しも エ 逆に オ 予想通りに

b 「放心したような顔」

ア やる気のないような顔 イ 悲しみにうちひしがれたような顔 ウ 不安でたまらないような顔

エ ほんやりしたような顔 オ 安然としたような顔

問二 空欄 1～4 に入る言葉として最も適当なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア チラツと イ うつとりと ウ そつと エ すつきりと オ ホツと カ イラつと

問三 本文には次の一文が抜けています。どこに入れるのが最も適当ですか。あてはまる箇所の直前の五字を抜き出して答えなさい。

甲羅に、まだらになった銀色のマジックインキが残っていたからだ。

問四 傍線部①「時間の問題」とあるが、これについて説明した次の文の空欄にあてはまる語句を八字以上十二字以内で答えなさい。

「時間の問題」とは「結果はすでに決まっています、あとはその時が来るのを待つだけという状況」をいうが、この場面での「すでに決まっている結果」とは ことである。

問五 傍線部②「それをばあちゃんに「返す。」とは言えなかった」のはなぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア せっかく作ってくれた袋を返したら、「カッコいい。」と褒めてくれた担任がっかりすると思ったから。

イ ばあちゃんが自分のために作ってくれた袋をまだ破れていないのに返したら、母親にしかられると思ったから。

ウ 死んだじいちゃんの着物でせっかく作ってくれた袋を返すのは、ばあちゃんに申しわけないと思ったから。

エ 高価なじいちゃんの着物で作ってくれた袋を返すのはもったいなくて、ばあちゃんを悲しませると思ったから。

オ ばあちゃんが自分のために一生懸命けんめい作ってくれた袋を返したら、二度と作ってくれないだろうと思ったから。

問六 傍線部③「僕は、息を切らして〜思い出していた」とあるが、このときの「僕」の気持ちとして最も適当なものを次から選び、

記号で答えなさい。

ア ばあちゃんと自分との間のあまりにも多い記憶に圧倒あつとうされる気持ち。

イ ばあちゃんとの思い出が細切れでわずらわしい気持ち。

ウ ばあちゃんが今まですぐ近くにいたことを不思議に思う気持ち。

エ ばあちゃんとの間にあった「全部」を覚えていないことがくやし気持ち。

オ どうでもいいことばかり覚えていることをおもしろがる気持ち。

問七 傍線部④「その間で〜小さかった」から読み取れる「僕」の気持ちの説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

い。

ア 病院に来るのが遅くなってしまう、母にしかられるだろうとおそれている。

イ 何の役にも立たないものを持ってきてしまったと思い、気持ちが沈しずんでいる。

ウ 自分の持ってきたものがばあちゃんのためになるにちがいないと信じている。

エ もっと役に立つものがあつたことに気づいて取りに帰ろうかと迷っている。

オ 大事な口紅をなぜポケットなんかに入れてしまったのだろうとくやんでいる。

問八

傍線部⑤「笑いながら泣いていた」について、六人の生徒たちが次のように話し合いました。本文の内容に合った意見を述べている生徒を二人選び、A～Fの記号で答えなさい。

生徒 A

お母さんはその前に「僕」のことを「バカ。」ってなじっているから、息子に気をつかいながらも、口紅なんて役に立たないものを持ってきた息子が情けなくて涙が出てきたんじゃないかな。

生徒 B

そうかな。「バカ。」って言ったのは、ばあちゃん愛用とはいえ、この場にわざわざ口紅だけを持ってきた息子に対して最初は驚いてちよつとあきれれる気持ちだったんじゃないかな。

生徒 C

うんうん、そうだと思うよ。ばあちゃんに塗ってあげられるし、ちよつとよかった。機転を利かした息子のかしこさに感心して涙が出てしまったのかも。

生徒 D

たしかにね。お父さんもないし、お母さんは心細かったと思うよ。息子が来てくれて安心できて、それで涙が出てしまったのかもしれないね。

生徒 E

というよりは、最初はちよつとあきれて笑ったけど、口紅を持ってきた息子のばあちゃんへの愛情と優しさを感じ、それで死んでしまったばあちゃんへの思いがあふれ出て泣いたんだと思うな。

生徒 F

そうだね。きつとお母さんは、優しい息子がばあちゃんのために口紅を持ってきてくれることを予感していたんだよ。それが当たって泣くほどうれしかったんだよね。

問九

傍線部⑥「このため」とあるが、「僕」は自分がずっと走ってきたのはどうするためだったとわかったのですか。「ばあちゃん」・「毎朝」・「口紅」という言葉を必ず使って、「くため。」につながるように、四十字以上五十文字以内で答えなさい。

問十

空欄5に入る言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 孤独こどくでさびしげな

イ 苦しげでつらそうな

ウ 生き生きと元気いっぱいな

エ 穏やかおだできれいな

オ 穏やかだが悲しげな